

釜  
名  
稱

行厨、春撞、攜盒、提盒、山遊提合、食羅等の號、群籍の中多く載す、酒食を納て山川に遊ぶに用ゆ、彼土の制、此土に用に不便なり、世上多く品を盡して形狀有意に任て取用ゆべし、今爰に委くせず、予○大枝流芳 其形を細く長く作る、世上之物とたがふ、是童僕携來て食器なりと人不見、或書籍、或は卷帖表緋の箱の狀に作る、又俗ならずして可なり、

〔新撰字鏡〕天 鬻字林反、平、釜屬、倭云加奈月。


〔同〕金 鑷久具反、戟屬也、兵也、倭加奈月。

〔倭名類聚抄〕十六 釜器 古史考云、釜扶兩反、上聲之重、與輔同、和名賀奈閉、一云末路賀奈倍、黃帝造也。

〔箋注倭名類聚抄〕四 釜器 按扶屬奉母、唇音並母之輕、此云重未詳、○中 按加奈倍、蓋金塙之急呼、今俗呼加万蓋誤、以竈訓爲釜之名也、

〔下學集〕下 釜器財

〔物類稱呼〕四 釜器用 釜かま 江戸にて稱するかま、 如此を畿内及西國四國俱にはがまといふ、西關

にて、はがまの煎じて茶がまといふ、に又江戸にて云ちやがま、 如此を畿内及西國にてくわんすと云、東國にてくはんすとよぶものは、はのなき物につるをかけたるをいふ、四國にてあられくわんすとよぶたぐひ也、

今按に、上世かなへといひし、あし鼎まる鼎などいひし物を、後かまといひ、はがまなどよぶ、

安房の國の浦里に、かなへむらといふ所あり、大いなる釜のふた、荒波に打あげられて、今なを

有とかや、往古かなへむらとなづけたる成べし、

〔東雅〕十一 釜器用 釜かまへ 倭名鈔に釜はカナへ、一にマロガナへといふと注したり、カナへの義は、鼎

の釋に見えたり、マロガナへとは、其腹下の圓かなるをいふなり、釜をカマといひ、竈をカマドと

いふが如きは、後の俗より出でたり、古に竈をカマと云ひしを、後俗に釜をよびてカマとなし、

の遺れる也、釜をカマといふが如きは、竈又瓦を燒きぬる竈の如きは、カマといふが如きは、猶古語